

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320065

研究課題名(和文)ロシア文化論の研究 - 制度化の諸相と脱中心化の可能性

研究課題名(英文)On Russian Culturology: Aspects of Institutionalization and Possibilities of Decentralization

研究代表者

野中 進 (NONAKA, Susumu)

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：60301090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,200,000円

研究成果の概要(和文)：「現代ロシアにおける新しい『ロシア文化論』の諸相を明らかにすること」を中心に進められた本プロジェクトは以下の成果をあげた。

(1) 代表者・分担者の共編者『ロシア文化の方舟』(H23)でソ連崩壊後20年のロシア社会・文化の変遷を多方面から議論した。(2) 同じく『今、ソ連文学を読み直すとは』(H23)で「ソ連文学」を文化制度として捉え、分析を行った。(3) 同じく『再考ロシア・フォルマリズム』(H24)において20世紀ロシア文学・文化におけるオルタナティブ的存在の一つロシア・フォルマリズムに関する理論的再検討を行った。(4) 韓国、ロシア等の若手・中堅研究者との国際共同セミナー(H23と24、東京)。

研究成果の概要(英文)：This project has a main purpose of investigating several aspects of "Russian Culturology" which seems to play an important role in Russian society these years. We have got such results: (1) we edited a book "The Ark of Russian Culture: 20 years After the Dissolution of the Soviet Union" (Tokyo, 2011) where we analyzed the changes of Russian culture after the Soviet Union in many fields; (2) we edited a book "What was the Soviet Literature?" (Saitama, 2011) in which we discussed the history and role of Soviet literature and how we should read the subgenre which was gone. (3) we edited a book "Rethinking on Russian Formalism" (Tokyo, 2012) where we are engaged with rethinking on Russian Formalist movement which played a distinctive role in Russian literature and culture in the twentieth century. (4) we organized two international seminars on Russian literature and culture (2011 and 2012, Tokyo). This project continues after the project with many results (a co-authored paper and a book).

研究分野：ロシア文学、ロシア文化、文学理論

キーワード：文化研究 ロシア 文化学 文学研究

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ソ連崩壊後のロシアにおける「ロシア文化論」の形成については、世界的に見て豊かな学術蓄積がある。とりわけ、新しい「ロシア文化論」の重要な要素と見なされている諸分野 - 保守主義(スラヴ派、ユーラシア主義など)の再発見、ロシア正教の復活、文学の変容、大衆文化の隆盛、メディアの機能など - についての研究が盛んになりつつあった。

(2) 本研究応募者もまた、科研費による二つの研究プロジェクト「ロシア・フォルマリズム再考 - 新しいソ連文化研究の枠組における総合の試み」(基盤(C)、平成 17 - 18 年度)および「ロシア的主体の系譜 - 現代ロシア文化の自己表象とその文化史・思想史的相関」(基盤(C)、平成 19 - 21 年度)を組織し、日本国内での「ロシア文化論」研究の一角を担い、研究成果を国際的に発信してきた。さらなる「ロシア文化論」研究の発展と発信が必要とされていた。

## 2. 研究の目的

(1) 以上のような背景に則り、本研究では「ロシア文化論」の制度化の諸相を分析することを目的とした。「ロシア文化論」思想的要素(意味内容)とは別に、それが現今のロシア社会でどのような制度的な裏付け(高等教育、文化行政、ジャーナリズム、商業文化レベルでの)に支えられて生成・流通しているのかを調べることである。

(2) それと同時にひとしく重要なのは、一通りの「ロシア文化論」だけが存在するのではないこと、公式的・支配的なロシア文化論に対してオルタナティブ的なロシア文化論も機能しつつある点に着目することである。とりわけ、「脱中心化」のさまざまな現れに注目すべきであるとわれわれは考えた。具体的には、脱モスクワ中心主義(地方文化への着目)、脱ロシア人中心主義(多民族性への着目)、脱正教中心主義(正教以外の

宗教性への着目)を柱にする。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、研究対象である「ロシア文化論」の形成プロセスについて、五つの研究班(文化理論、文学、映像文化、宗教文化、メディア)を作り、各班で資料に基づく実証的研究を進めるとともに、国内研究会・国際セミナーにおいて成果報告と討論を行うこととした。

(2) それに並んで重要だったのは、本研究の活動を国内に限定するのではなく、ロシアと東アジアの研究者との研究交流の枠組のなかで進めることであった。国際セミナーを開き、われわれの問題意識と成果が国際的な水準に耐えうるものであるかをフィードバックしつつ、研究を進めることを重要視した。

## 4. 研究成果

前項で述べた五つの研究班ごとに研究成果を説明する。

(1) 「文化理論」班における成果：研究代表者と分担者の共編著『ロシア文化の方舟』(東洋書店、2011)は現代ロシアについて 36 篇の論考を治めた論文集であるが、文化理論について一連の論考がある(野中進「文化学 国民アイデンティティを組み換える」; グレチュコ・ヴァレリー「ロシアはいくつある? 外国に住むロシア人たち」など)。ここでわれわれが明らかにしたのは、国家によるロシア文化論の「統一・規格化」の動きにもかかわらず、実際のロシアには公式的ロシア文化論に対抗するさまざまなオルタナティブ的ロシア文化論が生まれており、勢力を増しているということであった。

また、同じく研究代表者と分担者の共編著『再考ロシア・フォルマリズム 言語・メディア・知覚』(せりか書房、2012)でも、20 世紀ロシアで重要な役割を果たした文学・文

化理論であるロシア・フォルマリズムの再検討を行った（貝澤哉「詩的言語の現象学、あるいは、声と記号のあいり」ユーリイ・トニャーノフ『詩の言語の問題』をめぐって」；野中進「詩とプロパガンダの意味論 トニャーノフがいちばんやりたかったこと」など）。

(2)「文学」班における成果：

前掲書『ロシア文化の方舟』、『再考ロシア・フォルマリズム』で文学に関する多くの考察を行った（中村唯史「ソ連文学」史の書き替え 帰還、奪還、揺らぎ」；岩本和久「ソルジェニーツインの、あるいはロシア文学の終わり」など）。われわれが明らかにしたこととして、「ソ連文学」という枠組がソ連体制とともに完全に終わってしまったわけではなく、いまだにロシア文学を論じる上で重要な枠組として機能していることが挙げられる。この着眼に基づいて、研究代表者と分担者の共編著『いま、ソ連文学を読み直すとは』（埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書、2011）も編まれた。国家体制と文学という文化制度が必ずしも同期するのではないことが明らかにされた。

(3)「映像文化」班における成果：

前掲書中、映像文化に関する多くの論考がある（長谷川章「スターリン期のフォルマリスタ的瞬間」；佐藤千登勢「幾何学的フォルムの可能性 ヴィクトル・シクロフスキの場合」；鴻野わか菜「父なき世界 フィルムのなかのロシア」など）。映像は文学に代わる主要メディアとしてロシア文化論においても大きな位置を占めている。世界共通の潮流とともにロシア独特の主題的・手法的要素があることを明らかにした。

(4)「宗教文化」班における成果：

前掲書中、宗教文化に関しても多くの論考がある（井上まどか「多宗教国家ロシア 伝統探しの諸相」；塚田勉「古儀式派の復活 グローバルなネットワーク」；渡辺圭「現代口

シアに生きる聖人たち」など）。宗教文化はソ連崩壊後のロシアにおいてきわめて重要な役割を果たしており、その研究も盛んである。われわれは世界的な研究動向を踏まえつつ、とくにその制度面（宗教法、古儀式派の世界的ネットワーク、聖人崇敬のシステムなど）を分析した。

(5)「メディア」班における成果：

前掲書中、メディア論に関する多くの論考がある（グレチュコ・ヴァレリー「政治と笑い」；乗松亨平「真実は人の数だけある？ ロシア・メディアのなかのチェチェン戦争」；神岡理恵子「ロシア・テレビドラマの現在 文芸大作からシットコムまで」など）。メディアの急激な自由化・多様化と国家による制限の試みもまた、今日のロシア社会を特徴づける要素である。われわれはそのさまざまな諸相に光を当てた。

(6)東アジアを軸とする国際研究ネットワークの構築：

前項で示したように、本研究では国内の若手研究者を積極的に登用したが、それと同時に、東アジアとロシアの若手・中堅研究者とのネットワーク作りも重視した。2012年1月と5月に東京でロシア文化論に関する国際セミナーを開催した。これによって得られた韓国・ロシアの研究者とのネットワークはひじょうに貴重なものである。本研究終了後もこのネットワークを生かした共同発表・共編著などの試みが続けられている。こうしたネットワーク作りはこれまでのロシア文学・文化研究において欠けていたものであり、本研究のもっとも重要な成果といっても過言ではない。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計13件)

井上まどか、ユートピアがディストピアになるとき ソルジェニーツインのロシア論における悪の不在、清泉女子大学人文科学研究紀要、査読有、No.35, 2014, pp. 67-92

貝澤哉、擬態への不可能な欲望 ウラジーミル・ナボコフ『絶望』についてのノート、現代文芸研究、査読有、No.4、2014、pp. 18-34

野中進、ヴァシーリー・ローザノフの創作の発展における読者の手紙の意義（『うす暗い、解かれざる世界で』など）【原文ロシア語】、Japanese Slavic and East European Studies、査読有、No.33、2013、pp. 61-83

野中進、ヴァシーリー・ローザノフの保守主義の自己規定【原文ロシア語】、クリミア文学研究集、査読有、No.9(1)、2013、pp. 322-339

貝澤哉、哄笑される悲劇、あるいは小説は存在しない ミハイル・バフチンの小説論における「悲劇」と「笑い」について、早稲田現代文芸研究、査読有、No.3、2013、pp. 36-49

グレチュコ・ヴァレリー（アイメルマツヒャー・カールとの共著）、文化と創造性：学術的アプローチから【原文ロシア語】、システム文化研究、査読有、No.3、2013、pp. 96-112

野中進、日本におけるアンドレイ・プラトーフ：ソヴィエト文学の受容の問題【原文ロシア語】、ロシアと日本：人文研究（ロシア連邦極東連邦大学刊）査読有、No.1、2012、pp. 142-155

貝澤哉、ロシア文学：現況と翻訳・研究、文藝年鑑、査読有、No.1、2012、pp. 103-105

中村唯史、1910 - 20 年代のエイヘンバウム：フォルマリズムとの接近と離反の過程、スラヴ研究、査読有、No.59、2012、pp. 25-59

中村唯史、アウステルリッツの空を埋めるバフチンのトルストイ観【原文ロシア語】、Rossica Lublinensia（ポーランド・ルブリヤナ大学）査読有、No.7、2012、pp.289-296

グレチュコ・ヴァレリー、ユーリー・ロトマンにおける非対称的コミュニケーションのモデル その成立と影響【原文ドイツ語】、爆発と辺境、査読有、No.1、2012、pp. 79-96

グレチュコ・ヴァレリー、芸術の普遍言語を求めて カジミール・マレーヴィチにおける不可的要素について【原文ロシア語】、シュプレマティズムの芸術、査読有、No.1、2012、pp.89-102

井上まどか、現代のロシア正教会における女性像、宗教と社会、査読有、No.18、2012、pp. 49-62

〔学会発表〕(計6件)

野中進、大戦期のヴァシーリー・ローザノフ 思想的正統性と大衆的愛国のあいだで、日本ロシア文学会第63回全国大会、2013年11月3日、東京大学（東京都・文京区）

村田真一、フォルマリズムのアイデアと1930年代までのロシア・アヴァンギャルド【原文ロシア語】、ロシア・フォルマリズム学派100周年記念国際会議、2013年8月26日、ロシア人文大学（ロシア連邦・モスクワ市）

野中進、保守主義の自己規定：V.ローザノフの場合【原文ロシア語】、第5回東アジア・スラヴ・ユーラシア会議、2013年8月9日、大阪経済法科大学（大阪府・八尾市）

中村唯史、大戦間期の日本とソ連の文芸における「声」、日本比較文学会東北大会、2012年11月17日、山形テルサ（山形県・山形市）

グレチュコ・ヴァレリー、言語からの脱出：アヴァンギャルドの脱言語化の戦略【原文ロシア語】、近代の分化：スラヴと日本の対話、2012年8月30日、ベオグラード大学（セルビア共和国・ベオグラード市）

野中進、V.ローザノフの創作において読者の手紙がもった意義（『うす暗く不確かな世界の中で』など）【原文ロシア語】、〇議なりア2012：文化とテキストの境界、2012年8月26日、カシーモフ市文化センター（ロシア連邦・カシーモフ市）

〔図書〕(計4件)

貝澤哉（ラーニン・ボリスとの共著）、東洋書店、二世紀ロシア小説はどこへ行く 最新ロシア文学案内、2013、63（担当ページ1 - 30）

貝澤哉、野中進、中村唯史他、せりか書房、ロシア・フォルマリズム 言語・メディア・知覚、2012、225

野中進、中村唯史他、埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書、今、ソ連文学を読み直すとは、2011、90

野中進、三浦清美、グレチュコ・ヴァレリー、井上まどか他、東洋書店、ロシア文化の方舟、2011、407

〔産業財産権〕  
出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://nonakasusumu.jimdo.com/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野中 進 (NONAKA, Susumu)  
埼玉大学・教養学部・教授  
研究者番号：60301090

### (2) 研究分担者

中村唯史 (NAKAMURA, Tadashi)  
山形大学・人文学部・教授  
研究者番号：20250962

貝澤哉 (KAIZAWA, Hajime)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：30247267

グレチュコ・ヴァレリー (Grecko, Valerij)  
神戸大学・国際文化学部・非常勤講師  
研究者番号：50437456

長谷川章 (HASEGAWA, Akira)  
秋田大学・教育文化学部・教授  
研究者番号：60250867

井上まどか (INOUE, Madoka)  
清泉女子大学・文学部・講師  
研究者番号：70468619

村田真一 (MURATA, Shinichi)  
上智大学・外国語学部・教授  
研究者番号：00265555  
(平成25年度から)

### (3) 連携研究者

なし